

No. J2109

1960年代以来インドネシアにおける解放の神学と華人神学の伝統の生成に関する人類学的研究

京都大学・文学研究科博士後期課程
王作造

この研究は、華人コミュニティの空間性が宣教史の構造に重要な役割を果たしていると考えられており、1960年代以来の歴史文脈のなかで、インドネシア華人による神学的理解と実践を考察してみる。文献調査とフィールドワーク調査では、以下の点を中心に伺いたいと考えている。

第一に、国立公文書館所蔵の公式記録、新聞、公式統計、日記と書簡などの歴史的文書のなかで、華人コミュニティの変容とキリスト教の布教に関連する記事の調査分析を通して、華人論が戦後インドネシアの思想界・言論界に及ぼした知的達成の輪郭を学知として歴史化させ、社会思想・社会運動・隣接諸学理との影響関係に留意しながら明らかにする。第二に、華人アイデンティティの再構築に注目して、スハルト期インドネシアにおいて生活基盤を維持してよりよく生きるために共同性の再編成をとりまくダイナミックな地域構造、特に東ジャワ州の宗教的信念の複雑性を読み解いていく。

一年目の研究は、京都大学東南アジア研究所図書室、日本国立公文書館とオランダのライデン大学図書館で華人の出版日記や、回想録、記載新聞などを収集してからはじめた。現在までの調査ではインドネシア官報、旧植民地報告書「Koloniaal Verslag」、植民地雑誌「Koloniaal tijdschrift」、華人系新聞紙「新報」(戦前)、「Antara Warta Berita」(1962~)、スラバヤの教会チラシ(1980~現在)、回想録などが手に入った。

華人コミュニティの変容とキリスト教の布教に関連する記事を調査・分析して、さまざまな宗教勢力間の力の比較と競争は、背後にある支持勢力の対立であるだけでなく、急速な近代化と関係しているのであるということが明らかになっている。インドネシアの近代化の進展に伴い、地球規模での情報技術の急速な流れと交換が民族文化の再構築をもたらした。それゆえ、安定性に欠けている華人文化にとって、急速な近代化による文化の流動性をさらに促進されている。この文化の流動性は、文化的地域性を重視することだけではなく、民族グループの国際性を急速に構築することに表れている。

また、スラバヤ市のPamendi教会に関する情報からみると、この教会は、インドネシアのカトリック教交流の交差点として機能していると考えられる。ジャカルタからマルク地方へ、またはマルク地方からジャカルタへの伝道者たちは、この教会に一時に留まることが多いである。これらの宣教師の活動を伴い事柄を把握すれば、インドネシアにおけるカトリック教会の宣教史をより完全に把握することができると考えられる。この流動性を論じるとき、中国人学者の費孝通による提案していた「民族回廊」との類似性はいかに可能か、いま検討している。